神村律子超短編ホラー集

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神村律子超短編ホラー集

【Nコード】

N8539J

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

暇潰しにどうぞ。使い回しの短編ホラーです。

ドライブ

外は快晴。

風もほとんどない。

遠くに見える海も波は穏やかで、すでに海水浴客でこった返している。

私は助手席に彼女を乗せ、国道を南下していた。

日差しが強くなって来た。

「暑くないか？ エアコン入れようか？」

彼女は窓の外に顔を向けたままで何も答えてくれない。

さっきの口論が原因だ。

それ以降一言も口を利いてくれない。

私は苦笑いをしてエアコンのスイッチをオンにした。

ゴオオオツと冷気が吹き出し、瞬く間に車内は快適な温度になった。

「そんなに私と口を利くのが嫌なのか？」

その返答もない。私は肩をすくめてハンドル操作に集中した。

やがて私は道沿いにあるコンビニに車を停めた。

「何か飲むか？」

しかし彼女はそっぽを向いたままだ。

「わかったよ」

私は一人で車を降り、コンビニに入った。

「ここに置いてくよ」

私は彼女の分の缶コーヒーをホルダーに入れた。

車は再び国道を快調に走った。

しばらく進むと、警察が検問をしていた。

「嫌だな、こんなところで」

私は警官の指示に従って車を停止した。

「免許証を拝見」

「はい」

「隣の方は気分でも悪いのですか？」

「ええ。車に酔ったみたいで」

「そうですか。安全運転をお願いします」

「はい」

私はホツとして、

「良かったよ。根掘り葉掘り聞かれたらどうしようかと思った」

ここでようやく彼女から反応があった。

「今は切り抜けられたから良かったけど！ だから言ったのよ、こっちは検問をよくしてるって！ 貴方は私の忠告を無視して！」

彼女は今まで黙っていた分を取り戻すかのように捲し立てた。

「私が間違ってたよ。国道はやめよう。脇道を進めば、いい場所があるさ」

「この車、私のなんだからね！ さっさと捨てたいのよ、トランクの中の死体を！」

おはじき遊び

私達は双子の姉妹。

私達はとても仲がいい。

お互いの事が大好き。

ずっと一緒にいようねと誓った。

だから、もう随分と長い間、同じ家で暮らしている。

もういい大人だ。

でも、今でもおはじきで遊ぶのが大好き。

笑われるかも知れないが、これ以上楽しい遊びはないのだ。

いろいろな色のおはじきを作り、遊ぶ。

今日もたくさんおはじきができた。

赤、青、黄色。紫も、ピンクもある。

最近たくさんおはじきが作れるようになった。

おはじきの出来不出来は、その時によって違うのだ。

妹のマミは赤とかピンクが好き。

私は青とか緑が好き。

だから、色の取り合いになった事はない。

明日もたくさんおはじきが作れそうだ。

愚かな人間達が、長く続けている「戦争」と言う名の殺し合い。

私達は肉体を失った人間達の魂を捕え、丸めておはじきにしているのだ。

昔よりたくさんおはじきができるようになったのは、人間達が一度にたくさんさんの命を奪う方法を考え出したからだ。

人間達が死のうが生きようが、私達には関係ない。

でもあまり一度に多くの人間が死んでしまうと、その時はたくさんのおはじきが出るかも知れないけれど、後々、材料不足になる恐れがある。

ま、おはじきが作れなくなったら、また新しい遊びを考えればいいんだけどね。

私達悪魔には、時間は無限にあるのだから。

降りしてくれ

私は高いところが苦手だ。理由はわからない。何ものにも代えがたいくらい怖い。

それなのに今日も高い所に行かされる。

誰も降りしてくれない。誰も交代してくれない。

もう嫌だ。逃げ出したい。

しかし誰もそれを認めてくれない。

「安全バーをしっかりと下ろして下さい」

いつものアナウンスが流れる。まただ。また行かなければならぬ。

カタンカタンと振動音がする。ゆっくりゆっくりと私は一番高い所へと連れて行かれる。

「キヤー！」

若い女性の歓喜とも絶叫ともつかない声が聞こえる。

私は声が出ない。目を瞑ることもできない。何もできない。

私が何をしたというのだ？ この仕打ちは何だ？ 理解不能だ。

元の位置に戻った。女性は降りたが、私は降りしてもらえない。

夢なら早く覚めてくれ！　しかし夢ではない。

紛れもない現実なのだ。非情なほどの結論。

声も出せず、目も瞑れずにまた戻って来る。でも恐怖は終わらない。

しかし何か様子がいつもと違う。乗客は待機させられている。

係員達はヒソヒソと会話している。

私の方を見て悲しそうな顔をしている。

何だ？　哀れみか？　そんなものはいらぬ。

私が欲しいのはこの恐怖からの解放だ。

すると一人が私に近づいて来た。

もしかや降ろしてくれるのか？　ようやく願いが叶うのか？

係員は私を見て言った。

「この車両はもう限界だからスクラップだな」

立て籠もり

私は今、使われなくなつて久しい廃工場にいる。

「武器を捨てて投降しなさい。君は完全に包囲されている。逃亡は不可能だ」

「うるせえ！ それ以上余計な事抜かすと、この女ぶつ殺すぞ！」

犯人は狂乱状態一歩手前だった。私は意を決して賭けに出た。

「何を言っているんだ。君は一人だ。人質などいないぞ」

「ふざけるな！ 人質はいる！」

「ならばその人質を我々に見せてくれないか？」

しばらく沈黙が続いた。

「やはりいないのだな？ 人質がいると偽って時間を稼ぎ、仲間の到着でも待つつもりか？」

「違う！ 人質はいる！」

「いや、いない。君は一人だ。事件はもう一ヶ月前に終わっているんだ。人質は無事救出している」

「嘘をつくな！」

犯人は頑強だった。私は冷静に言った。

「君はその時の銃撃戦で死んだのだよ。もうそこに留まるのはやめて、楽になりなさい」

「・・・」

犯人は工場から出て来た。私は犯人に近づいた。彼は泣いていた。

「さあ、もう行きなさい。君はここにはいけない」

犯人はかすかに頷き、スーツと消えて行った。

「ありがとうございました」

そう言って私に声をかけたのは、犯人の母親だった。

「これで息子もようやく成仏出来ます」

「はい」

そんな私達を遠くから見ていた黒ずくめの男が、

「あんた達、もう気がすんだろう。そろそろあんた達も行ってくれないか？」

えっ？

私は犯人の母親と顔を見合わせた。

そうか。

私はあの日犯人と撃ち合って死んだ。

そして犯人の母親は息子の死を知って自殺。

私達は皆死んでいたのか。

山荘にて

今、私と私の恋人である里美は、荒れ狂う暴風雨を窓から見ていた。

私たちがいるのは、山の麓にある別荘。

その中のロビー兼居間のような部屋に、私達を含めて三組の男女がいた。

それぞれ肩を寄せ合い、男が女を励ますという光景が目に入る。

そのうちの二組は、あからさまに不倫とわかる年の差カップルだ。

年の差婚の可能性もあるが、二人の会話を聞いている限りでは、多分不倫だ。

もう一方は20代、あるいは10代後半のカップル。

男が泣きじゃくる女を宥めている。

何故こんな状況なのか？

それは、この別荘の持ち主である富豪の老人が、寝室で殺されたからだ。

女性達は恐怖に震え、泣き叫んだ。

私と年の差カップルの男はどうか相手を落ち着かせる事に成功

したが、若い男はまさしく火に油状態で、男が何か言えば言うほど、女の泣き声が大きくなる。

「少し静かにできんのかね？ 子供じゃあるまいし」

年の差カップルの男、及川が言い放った。

「るっせえよ、ジジイ。余計なお世話だ」

若いカップルの男、沢口が言い返した。

「人が殺されたんだ、泣きたくもなるだろ？」

「それはわかるが、もう少し落ち着かせてくれ。もう小一時間ほど経つんだぞ、あんたの彼女が泣き出してから」

及川の苛立ちもわかる。しかし、沢口の彼女が泣くのもわかる。

何しろ、この別荘は陸の孤島なのだ。

暴風でここに来るための吊り橋が落ち、逃げる事ができない。

その上殺人犯がいるのだ。

絶望的な状況で取り乱し、泣きじゃくるのは仕方ない事だ。

泣くなと言う方が無理なのである。

私は軽く咳払いをしてから口を開いた。

「さて、次は誰が死にたい？」

走行妨害

夏休みは今日で終わり。

俺は1人、ボロボロの愛車に乗り、都内に向かっていった。

貧乏学生故、高速なんて利用できない。

ETCも着けられない。

国道と県道を走り、ユルユルと進んだ。

しばらくして、辺りは薄暗くなり、前も後ろもほとんど車がいなくなった。

渋滞を避けるために裏道を利用しているからもあったが、やけに交通量が少ない。

渋滞よりはマシか、と思い、気にせず車を走らせた。

「何だ、この車？」

前を走る1台の白いミニバン。

運転手の右肘が全開にされた窓からニユツと出ていた。

奇異なのはその事ではない。

時速30キロくらいしか出していないのだ。

しかも性格が悪い奴なのか、俺が追い越すために対向車線に出ると、加速する。

そんな事を何度か繰り返した。

イラついた俺は別の道に行こうと思い、脇道を探したが、運悪く一本道で、かわす事もできない。

しばらくは諦めて、そいつの後ろをノロノロと走った。

そろそろ油断しているだろう。

そう思って一気に加速した。

すると奴は意表を突かれたのか、あっさりと俺は忌ま忌ましいそのミニバンを追い越せた。

「!」

ギョツとした。

ルームミラーに写るミニバンには誰も乗っていなかった。

右肘だけが、窓から出ていたのだ。

「わっ！」

俺は急カーブに気づくのが遅れ、ガードレールに突っ込んでしまった。

「うっ……」

エアバッグに埋もれた顔を上げ、霞む目を外に向けた。

相変わらず、奴のミニバンはノロノロと進み、やがて見えなくなった。

追い越す時はその先の道路状況を確認する。

基本を怠った俺が悪かったのだろうか？

それ以来、俺は追越ができなくなった。

痴漢

む？

何だ、この感触は？

気のせいではない。

明らかに触られている。いや、弄られている。

満員電車で、皆が身動き取れないのをいい事に、やりたい放題という訳か。

何て品性下劣な男だ。

絶対に許さない。

私が降りる時か、こいつが降りる時に首根っことっ捕まえて、警察に突き出してやる！

でも、振り返る事すら出来ないの、奴の顔を見る事が出来ない。

あ、駅だ。

少しだけ人が動いた。これで奴の顔が見られる。

私は身体を捻るようにして後ろを見た。

真後ろにいたのは、中年のサラリーマン。

でも両手は吊り革。

私を触ってはいない。

他の奴？

もう少し身体を動かしてみる。

しかし、皆両手が見えている。

犯人がいない？

そんなバカな？

私のお尻は、今も触られたままなのだ。

こうなったら、この手を掴み、引き摺り下ろすしかない。

意を決して空いている左手で、まだ人のお尻を触り続けている手を抓った。

「いて！」

声が出た。

私は、その手を逃がさないように掴んだ。

「この痴漢、許さないわよ！」

私は次の駅に到着と同時に、犯人の手を掴んだまま、ホームに出た。

「さあ、警察呼ぶから、覚悟しなさい」

私は犯人を見るために振り返った。

そして腰を抜かした。

私のお尻を触っていたのは、「右手首」だけだったのだ。

最後の一撃

彼の命は尽きようとしていた。

余命幾許もない。まだこれからという時。

あまりに儂い一生。あまりに残酷な運命。

短過ぎる。何も成し遂げてはいない。

本当に終わってしまうのか？ これでおしまいなのか？

悲しいまでに潔い存在。狂おしい程美しい生き様。

彼はそれでも力の限り生きる事を諦めていない。

周囲が応援してくれる事もない。

誰も助けてくれない。仲間はずつと倒れた。

皆、命を散らした。彼より先に力尽きた。

しかし彼は生きる。

生きるのだ。生き延びるのだ。

最後の抵抗になるかも知れない足掻き。

彼は渾身の力を振り絞り、生への渴望を表現する。

まだ俺は生きている。生きているんだ！ 生きているぞ！

死んではない。死んではない！

生きているんだ！ 生きているんだぞ！

大声で叫ぼうにも、すでにそれは叶わない。

彼は声を出せない。そんな余力はすでにない。

うおおおっ！ ぬおおおっ！

足掻く。足掻く、足掻く、足掻くつ！

しかしそれも遂に終焉の時を迎える。

ドスツ……。

鈍い音がする。

まさに最後の一撃。

彼の命は尽きた。とうとう終わってしまったのだ。

でも悔いはないだろう。

彼は精一杯抵抗したのだから。

死に対して。

そして、無情な言葉が響く。

「はい、鯨の活け造りお待ち」

本当にあつたかも知れない怖い話

夏は怪談の季節。

多くの人々が涼を求めて怖い話をする場を設け、楽しめます。

そんな関係で、本当にあつたかも知れないお話を致しましょう。

聡は、昔から非常に怖がりで、同級生ばかりか、妹の友達にまで「怪談話」でからかわれていました。

そんな彼が高校2年の夏、部活の合宿で泊まったある湖のそばのユースホテルでのお話です。

町を離れ、山の麓にあるユースホテルに宿泊する事になった聡の所属するバスケット部は、日中の練習を終え、夕食を終え、入浴するために大浴場に行く所でした。

「ここさ、出るらしいよ」

「えっ?」

同級生の敦史の言葉に、聡はビクツとしました。

「出るって、何が?」

普段からクールな言動の幸喜が尋ねました。すると敦史は嬉しそ

うに、

「出るって言ったら決まってるだろ？ あれだよ、あれ」

「あれって、幽霊か？」

呆れ顔で言ったのは亮です。彼はオカルト完全否定派で、霊もUFOも信じていません。

「そうそう。それもさ、可愛い女の子の霊らしいんだ」

「ホントか、それ？」

と急に話に乗って来たのが三度の飯より女の子という陽介です。

「あんな。可愛い女の子っていうだけで目の色変えるなよ」

敦史は軽蔑の眼差しで陽介を見ました。

「ハハハ。でもさ、陰気なババアの霊よりはいいじゃん」

陽介は飽くまで陽気です。

「おいおい、聡が黙り込んだじゃったぞ」

幸喜が聡の異変に気づいて言いました。

「ああ、そうか、聡ってこついう話ダメなんだっけ？」

敦史が聡の顔を覗き込んで言いました。聡はゆっくりと頷きまし

た。敦史は笑って、

「ビビリだなア、ホントに。大丈夫だよ。出るワケないじゃん、幽霊なんて。な、亮？」

「当然だ。霊などというものは、全て錯覚だ。人間は死んだら土に還るんだよ」

亮の説は身もフタもないな、と敦史は思いました。

「やめろよ、そういう言い方！」

聡が突然大声で言いました。亮はびっくりして聡を見ました。聡は全員を見渡して、

「そんな言い方するから、その子が泣き出したじゃないか。皆は女の子を泣かして何ともないのかよ！」

敦史達が世界記録並みの速さでその場から逃げ出したのは言うまでもありません。

不愉快な手紙

私はそれなりに名の通った小説家である。

自分で言うのも可笑しなものだが、ベストセラーも何冊もあり、所謂「流行作家」の一人だ。

毎日いくつもの連載の締め切りに追われ、忙しく過ごしている。

そんな私を癒してくれるのが読者からの手紙だ。

何よりの励みになり、創作意欲を刺激してくれる、ありがたいものだ。

その中に一通辛辣な文面のあるのに気づき、目を通した。

初めてお便りいたします。

昨今の貴殿のご活躍、テレビや新聞、雑誌などでお見かけしております。

私には貴方の作品のどこにそれほどの魅力があるのか、全く理解不能です。

文章は稚拙、内容は二番煎じか、実際にあつた事件の焼き直し。

読者の皆さんの知能を疑うほど、お粗末なものばかりです。

私なら、もっと面白くてドキドキする話が書けます。

貴方がプロの作家として生活できているのなら、私にもできますよ。

そのくらい貴方の小説は低レベルです。

ある意味同情します。

貴方は実力もないのに祭り上げられてしまった「神輿」ですからね。

非常にお気の毒です。

ではまた。

私は手紙を読み終えて溜息を吐いた。

後ろからその様子を見ていたある出版社の編集者が声をかけた。

「凄い内容ですね」

「ええ」

私は悲しい顔をして編集者を見た。

「あのですね」

編集者は何か言おうとして躊躇しているようだったので、私は、

「何か言いたい事があるのなら率直に言って下さい」

と真顔で言った。すると編集者は私を哀れむように見て、

「そんな手紙を自分に出して楽しいですか、先生？」

背筋が凍る冬の夜話

退屈だ。

私は雪が降り頻るある日の夜、たった一人で炬燵こたつに当たっていた。

うん？

サクサク……。

誰かが我が家の狭い庭を歩く音がする。

サクサク……。

私は一人暮らし。家族はいないから、庭を歩いているのはかなりの確率で不審者。

サクサク……。

確実に玄関に近づいている。

私は億劫だったが、炬燵を抜け出し、玄関に向かった。

そして、下駄箱に立てかけてある斧を手に取り、侵入者に備える。

すりガラスの向こうに、人影が写った。

間違いなく、何者かが来ているのだ。

私は斧の柄をギュツと握り締めた。

コンコン。

ノックの音がする。律儀な不審者だ。

油断はできない。

私はそっとノブを回し、ドアを押し開いた。

「ホホホホ」

そこには雪女が立っていた。凍てつくような目、大きく裂けたよ
うな口。

長い髪が、風で広がり、まるで蛇がのたくっているようだ。

私は大声で叫んだ。

「遅いよ、雪ちゃん！ もう来ないのかと思ったよ！」

「ごめーん、座敷童子ざしきわらひこちゃん。今日、バレンタインデーでさあ。
忙しかったのよ」

私は肩を竦め、彼女を家に招き入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8539j/>

神村律子超短編ホラー集

2011年2月13日12時07分発行